

AO 入試合格者の「不安」と入学前教育への依存

島田康行（筑波大学）

入学前教育に対する高校の進路指導担当教員の評価と期待を明らかにすることを目的とした調査と、入学前教育に対する AO 入試合格者自身の評価と期待を明らかにすることを目的とした調査の結果から、高校教員と AO 入試合格者との意識の違いを窺うとともに、AO 入試合格者が抱く「不安」について考え、早期合格者に対する大学からの働きかけの在り方を考える。

1 はじめに

本稿では二つの調査の結果を報告する。

調査 A は、大学早期合格者を対象として実施される、いわゆる「入学前教育」に対する高校の進路指導担当教員の評価と期待を明らかにすることを目的としたものである。その評価や期待が、回答者の所属する高校の大学進学率によってどのように異なるのか分析を試みている。

調査 B は、平成 19 年度 AO 入試合格者に対する意識調査であり、入学前教育に対する合格者自身の評価と期待などを明らかにすることを目的として、T 大学 AO によって継続的に実施されているものである。

調査 A・B の結果から入学前教育に対する高校教員と AO 入試合格者との意識の違いを窺うことで、入学前教育など早期合格者に対する大学からの働きかけの在り方を考える一助としたい。

2 調査 A

2.1 方法

高等学校 454 校の進路指導教員を対象に、郵送による質問紙調査を行った。高校の選定は、AO 入試への出願実績があることを観点とし、具体的には、平成 18・19 年度において国立 T 大学の AO 入試に生徒が出願した高校の教員を対象とした。T 大学は関東地方の総合大学で、国立大学としては最も早く AO 入

試を導入した大学の一つである。

調査の概要は次の通り。

実施時期：平成 19 年 2 月中旬～下旬。

回答率：63.5% (289 校)

2.2 結果

ア. 推薦・AO 入試合格者（進学率別）

表 1 は、1 クラス当たりの、推薦・AO 入試による進学者数を、進学率別にまとめて示したものである。10 人以上という回答が、132 校 (45.7%) に上っている。

表1 進学率別 AO・推薦合格者

	AO・推薦合格者数 (人/クラス)				合計	
	3 人未満	3 人以上 6 人未満	6 人以上 10 人未満	10 人以上		
	90～	30	31	31	59	151
進 学 率 (%)	70～90	2	12	20	32	66
	50～70	2	3	9	29	42
	30～50	0	3	3	9	15
	～30	5	3	3	3	14
	合計	39	52	66	132	289

イ. 入学前教育の認知度と浸透度

入学前教育を実施する大学があることは、ほとんどの回答者が知っている。知らないという回答は全体で 2 件のみであった (Q1)。また、現在の勤務校に、入学前教育を受けて

いる生徒がいるか／あるいは過去においていたか、という質問にも277件(95.8%)が「はい」と答えている(Q2)。

さらに、入学前教育の一環として大学から出された課題等を見たことがあるかという問(Q3)には266件(92.0%)が「はい」と、そうした課題について生徒を指導した経験がある／またはそのような事例を知っているかという問(Q4)には186件(64.4%)が「はい」と答えている。

ウ. 入学前教育への評価

上のQ3, Q4のいずれかに「はい」と回答した者に、入学前教育の内容に対する評価を尋ねた。

具体的には、大学進学予定の高校生が学ぶにふさわしい適切な内容であったか(Q5a)、通常、高校では指導の難しい、大学ならではの工夫の見られる内容であったか(Q5b)の2問である。結果を図1に示す。

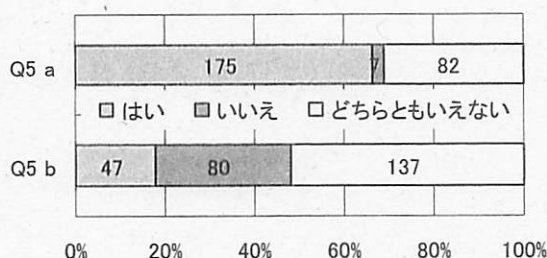


図1 「入学前教育」の内容について

適切な内容ではなかったという回答は2.7% (7件) にすぎないが、適切であったという回答も66.3% (175件) にとどまる。また、大学ならではの工夫が見られたという回答も17.8% (47件) と少数である。2つの間に「どちらともいえない」という回答が目立つのは、どのような内容が適切なのかという入学前教育の在り方に対する疑問の現れとも、大学によって差があり一概には答え難いという判断とも考えられる。

入学前教育の必要性について尋ねてみると(Q6)、入学前教育が必要であるとする高

校教員が、全体の84.8% (245件。「そう思う」57.1%, 「まあそう思う」27.7%) に上る。表2に示すように、大学・短大への進学率別の集計でも大きな偏りは見られない。入学前教育はその高校の進学状況にかかわらず、進路指導教員によって広くその必要性を認められていると言ってよい。

表2 「入学前教育」は必要か (進学率別)

	進学率 (%)				
	90~	70~	50~	30~	~30
そう思う	59.7	58.5	61.0	64.3	42.9
まあそう思う	27.1	35.4	24.4	14.3	42.9
あまりそう思わない	3.5	3.1	9.8	7.1	0.0
そう思わない	1.4	0.0	0.0	14.3	7.1
どちらともいえない	7.6	1.5	4.9	0.0	7.1
わからない	0.7	1.5	0.0	0.0	0.0

その一方で「現在の入学前教育は高校教育に資するものか」という問(Q7)への回答は、図2のように分かれている。

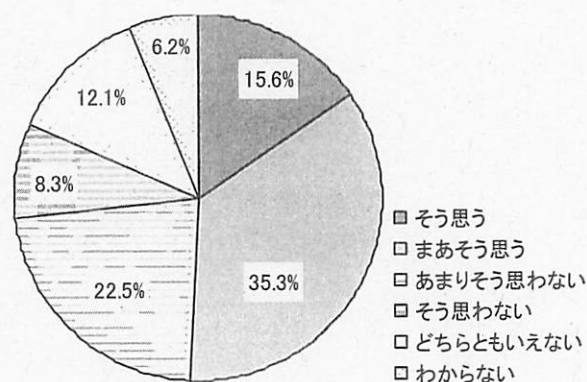


図2 「入学前教育」は高校教育に資するものか

この問への肯定的な回答は全体の約半数(「そう思う」15.6%, 「まあそう思う」35.3%) にとどまり、否定的な回答が30%を越えている。さらに、「入学前教育は必要か」という先の間とのクロス集計の結果は表3のごとくである。

表3 「入学前教育」は「高校教育に資するものか」×「必要か」

		高校教育に資するものか					
		そう思う	まあ そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	どちらとも いえない	わからない
入学前教育は 必要か	そう思う	41(14.7)	58(20.8)	29(10.4)	10(3.6)	19(6.8)	7(2.5)
	まあそう思う	3(1.1)	34(12.2)	23(8.2)	6(2.2)	8(2.9)	6(2.2)
	あまりそう思わない	1(0.4)	2(0.7)	6(2.2)	2(0.7)	1(0.4)	0(0)
	そう思わない	0(0)	0(0)	0(0)	4(1.4)	1(0.4)	0(0)
	どちらともいえない	0(0)	2(0.7)	6(2.2)	2(0.7)	5(1.8)	1(0.4)
	わからない	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0.7)

「入学前教育は必要か」という問に肯定的に回答した者に限ってみた場合、「高校教育に資するものか」という問にも肯定的に答えた者が 48.7% (136 件) にとどまる一方、否定的に答えた者は 24.4% (68 件) に上る。回答者の約 4 人に 1 人は、入学前教育を必要であると認めながら、それが必ずしも高校教育に資するものではないと考えているという結果である。

エ. 望ましい入学前教育の在り方

それでは入学前教育はどのような目的で行われ、どのような効果をあげることを期待されているのだろうか。これらの間に対する回答を進学率別にまとめてみる。

まず、入学前教育の望ましい目的を尋ねた問 (Q8) への回答は、図 3 のごとくである。

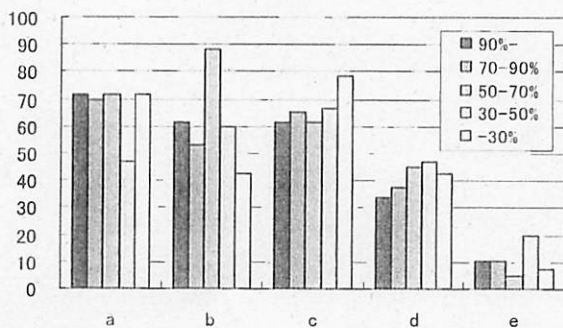


図3 「入学前教育」の望ましい目的(進学率別)

(選択肢 a~e の内容は次の通り。a:動機付け, b:学習習慣の維持, c:大学の学習への円滑な導入, d:基礎学力の向上・補完, e:その他。複数回答可)

「動機付け(a)」を筆頭に、上位 3 項目が 60% を超える。一方、「基礎学力の向上・補完(d)」は、全体では 40%に満たない。

また、進学率 50~70%の高校においては、「学習習慣の維持 (b)」を求める声がかきわめて高い (88.1%) ことが特筆される。こうした高校では、進学率のより高い/低い高校に比して、生徒の「学習習慣の維持」に大きな努力が払われていると考えられる。

次に、入学前教育に期待する効果について尋ねた問 (Q10) への回答を図 4 に示す。

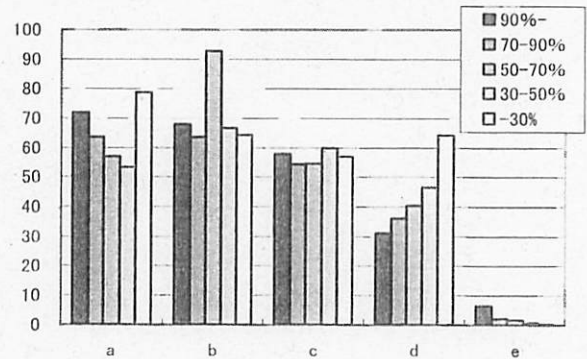


図4 「入学前教育」に期待する効果(進学率別)

(選択肢 a~e の内容は次の通り。a:動機付け, b:学習習慣の維持, c:大学の学習への円滑な導入, d:基礎学力の向上・補完, e:その他。複数回答可)

進学率30%未満の高校は、すべての項目に大きな期待を寄せている。「動機付け」も「基礎学力の向上・補完」も、大学による入学前教育を有効に活用したいという高校の事情がうかがえる。

これに対して、進学率90%を超える高校では「動機付け」への期待が大きい一方、「基礎学力の向上・補完」への期待は小さくなっている。

すべての項目に大きな期待を寄せている進学率30%未満の高校を除いて考えると、進学率が高いほど「動機付け」への期待が大きく、「基礎学力」への期待は小さい傾向にある。

また、「望ましい目的(Q8)」同様、進学率50~70%の高校が、「学習習慣の維持(b)」に大きな期待を寄せている(92.9%)ことを指摘し得る。

2.3 考察(A)

大学入試の多様化によって、大学進学者の背景もまた多様化を遂げた。これまで進学に対する意識が比較的低かった高校の生徒も大学に進むようになり、AO入試などの早期入試によっていち早く合格を決めた入学予定者が在籍する高校も、いわゆる進学校とは限らなくなっている²⁾。

高校における早期入試合格者への対応は高校の実態によって異なるはずであり、入学前教育に対する考え方もまた、それぞれに異なるものと考えられる。調査Aの結果は、高校の大学進学率によって入学前教育に期待する効果も異なる傾向にあることを示唆している。それはまた、ある募集単位の合格者が在籍する高校の進学率が多様である場合、合格者全員に一律の入学前教育を実施しても、高校の期待に満遍なく応えることは難しいということをも意味しよう³⁾。高校の実態に合わないプログラムが、かえって高校教員の負担を増すことになる場合もある⁴⁾。

3 調査B

3.1 背景

島田(2007)に述べたように、T大学では平成18年度よりAO入試合格者(入学者)に対する入学前の働きかけを実施している。初年度の実施を受けた学生の中には、それを不十分と感じた者も少なからずおり、学習の意欲や習慣を維持するためのさらなる課題や、教科の学力を確認するような内容の課題を要望する意見が聞かれた。

この結果を受けて、T大学AOは平成19年度合格者に対する働きかけの内容を一部改め、入学までの期間における主体的な学習の支援に努めた。

本節では、改善が図られた働きかけを経験した平成19年度合格者に対する意識調査の中から、入学前教育に対する評価と期待に関する部分を取り上げて、調査Aの結果と比較してみる。

3.2 方法

国立T大学の平成19年度AO入試合格(入学)者78名を対象として、郵送による質問紙調査を行った。

調査の概要は次の通り。

実施時期：平成19年2月~3月

回答率：85.9%(67名)

3.3 結果

A. 平成19年度合格者への働きかけ

ほとんどの合格者はこの働きかけ—自己推薦書の内容を再度まとめるレポートの作成を促す—があつてよかったと考えており、そうは思わないとする者は2名、どちらともいえないとする者は1名であった(Q1)。

さらに、このレポートの作成を通じて、「今の自分に足りないものは何か、入学前の期間に何をすべきかを、あらためて考えることができた」と考える者は57名(85.1%)、できなかったとする者は8名であった(Q2)。

しかし、今回の調査でも、この課題以外に

も何らかの働きかけが必要だと思いと回答した者は 56.7%に上り（平成 18 年度調査では 59.5%）、必要とは思わないと回答した者は 28.4%に留まった（Q3）。

イ. 望ましい入学前教育

それでは、合格者は入学前教育に何を望んでいるのだろうか。その質問（Q4、複数回答可）への回答をまとめて示す。

表 4 入学前教育の望ましい目的は

大学での学習への動機づけ	15
大学までの学習習慣の維持	30
大学の学習への円滑な導入	51
基礎学力の向上、補完	41
その他	6

大学での学習への動機づけを選んだ者が少なく（22.4%）、大学の学習への円滑な導入（76.1%）と、基礎学力の向上、補完（61.2%）と回答した者が多い。教員の回答で 60%を超えた「大学の学習への動機づけ」がここでは 20%程度であることが注目される。

3.4 考察（B）

入学前教育の望ましい目的について尋ねた質問（Q4）は、高校教員に対する意識調査 A の質問（Q8）と共通する。図 5 に両者の結果を重ねて示す。

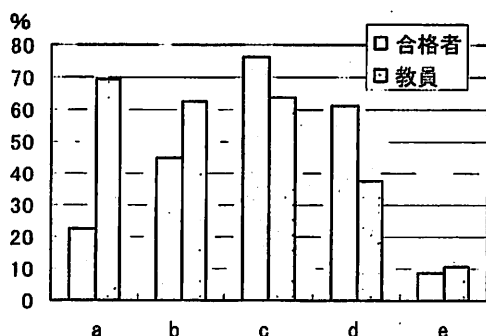


図 5 望ましい入学前教育の目的

（選択肢 a～e の内容は次の通り。a: 動機づけ, b: 学習習慣

の維持, c: 大学の学習への円滑な導入, d: 基礎学力の向上・補完, e: その他。複数回答可）

前章に述べたように、教員が望ましいと考える入学前教育の目的は、高校の大学進学率によって異なるのであるが、全体としては、動機付け、学習習慣の維持、円滑な導入への期待が大きい。これは、大学早期合格者に対して、他の受験生と同様に学習習慣を維持し、大学への意識を高く保持できるようにしてほしい、また、入学後は大学にうまく適応できるように導いてほしいという、言わば学校運営、学級運営の視点に立った回答であり、当然の結果とも考えられる。

これに対し、すでに合格を決めた学生が入学前教育に求めているのは、大学の学習への円滑な導入であり、また、基礎学力の向上と補完である。入学後、同級生の中では多数派となる一般入試の合格者と対等にやっていけるのか、大学の勉強についていけるのかという不安、そして何とかついていきたいという切実な願望の現われであると解される。また、大学での学習への動機づけを回答する者が少ないのは、この入試の合格者は選抜の過程ですでに十分に動機づけられているからであると考えられる。

4 おわりに

T 大学では、AO 入試に合格し、入学後、学習についていけなくなる学生は、他の入学経路の学生と比べて多いわけではない。

しかし、合格者がどのような内容の入学前教育を望ましいと思うか、自由記述によって回答させた結果からは、彼らが「学力」に「不安」を抱えていること、特に「一般入試合格者との学力の差」を想定し、それを強く意識していることが見て取れる⁵⁾。

大学によって、大学で学ぶに十分な資質と能力を有すると認められた受験生が、それでもなお「ついていけるのか」という不安を抱く理由の一つには、彼らが「学力試験を受け

ていない」ことがあるようである。

T大学における平成16年度の成績調査によると、AO入試の入学生は、全学生の成績上位50%に約40%が入り、成績下位25%に30数%が入っている。他の入試経路の学生と比べて、必ずしも成績が劣っているわけではない。この調査で最も成績が良かったのは、AO入試と同じく学力試験を受けずに入学する推薦入学の学生であったが、その推薦入学の学生からも、AO入試入学生と同じように、一般入試入学生についていけるかどうかを心配する声の時おり聞かれる。一方、一般入試入学生から、自分がついていけるかどうかを心配する声はほとんど聞かれないし、自分が推薦の学生と対等にやっていけるのかという発想はまず出てこない。未調査の印象ではあるが、学力不足を心配するのは、学力の如何によらず、入学時に学力試験を受けていない者ではないかと思われる。

このように、同級生の多数派が通ってくる道を自分は通っていないということが彼らの不安の根源にあるとするならば、学力試験を受けずに大学に入学することを少しでも否定的に捉える価値観が合格者の周囲に存在する限り、この不安を根本的に解消することはきわめて困難であろう。

本来、入学者選抜において学力試験を課さないことと、大学で学ぶ能力を確認しないことはまったく別である。そのことが受験生とその周囲の人々に正しく認識される必要がある。

一般入試で合格した学生の中には、一般入試で合格したことで自信をもつ者がある。また、そのことを誇りに思う者も少なくない。AO入試もまた、そのような入試でなければならぬ。どのような入試であれ、合格者がその入試で合格したことによって自信をもち、そのことを誇りに思うような入試であることが、入学後の学習を進める上でも重要な意味をもつのだろう。

注

- 1) 回答中には「高校在学中の生徒は高校の指導下であり、大学による入学前教育は容認できない」、また、「入学前教育が必要となるような受験制度自体を改めるべきである」という意見も少数ながらある。
- 2) 島田(2008)による。T大学の事例ではAO入試による入学者の出身校は一般入試とは大きく傾向が異なる。
- 3) 入学前教育は「高校の授業のノートを提出させればよい」という回答もあった。高校教育に資する高大接続のあり方を考える上では一考に価する。
- 4) 「入学前教育の指導を高校側に委ね、コメントや評価を求めるケースが増えている」という指摘や「高校側の負担になるものは避けていただきたい」という意見もあり、教員が入学前教育への対応に窮している実態も一部にはある。
- 5) 「一般入試の入学生たちとの基礎学力の差への不安を感じる。そのため、基礎学力の補完があることが望ましい」「一般入試の人の学力に差が生じていると思うので、基礎学力を高められるような課題を与えてほしい」といった回答が少なからず存在する。

参考文献

- 小林勝法(2006)「入学前教育の実際とその効果」『大学教育学会誌』27(2).73-74
- 島田康行(2008)「AO入試『志願理由書』の研究」『大学入試研究ジャーナル』18, 45-50
- 島田康行(2007)「アドミッションポリシーに応じた入学前教育の試行」『大学教育学会誌』29(1).169-175
- 渡辺哲司(2006)「国立大AO入試による入学者の特性」『大学教育学会誌』28(1).110-116